

教科書展示会の反省と

学ぶことの楽しみ (一)

市野瀬

仁

(会員・佐伯市長島)



二つの掲示物を見て

高木会長の示した「小学校教科書の沿革」の七ヶ条をみると二つのことに気がつく。一つは、内容こそ違いますが明治五年の「学制」の公布の頃と、現代は共に教科書を各県及各郡市単位の自由選択できめること。いま一つは日清、日露戦争後、義務教育が国定教科書の使用となり国家主義の方向へと傾斜していく思想統一の大きな力となったことである。

一方「学校教育史年表」からは、明治十年の西南戦争は国内戦争にピリオドをうった戦いであった。その後十年を経て学校令がしかれて義務教育四年となる。続いて

日清・日露の戦後に六年・日中戦争中に八年・敗戦後九年と延長されて今日に至ったことを読みとることができ。戦争を経験するたびに、義務教育の延長が実施されたことは何を意味するのであろうか。

歴史の節目に義務教育の延長がとられることは洋の東西を問わずみられる現象である。ただそのテンポの早さが他国にみられないのがわが国の特徴である。またそれと併行して就業率の急上昇は目を見はるものがある。ともにも最近の経済的繁栄が欧米列国をしのぎ世界経済に問題をおこすまでに至ったことはこれと無関係ではない。

ここで列国の革命と文盲率を比較してみるのもおもしろい。(フランス、日本は推定)

フランス革命（一七八九） 六三%
 明治維新 （一八六六） 七〇%
 ロシア革命 （一九一七） 八〇%
 中国革命 （一九四九） 八五%
 明治維新に流血が少なかったのは、文盲率（男性五〇%）が少なかったのも関係しているかもしれないという説がある。（世界の歴史―中央公論社）

修身の教科書を見て。

私の当番は最終日（四日の日曜日）の午前中であった。当番の席の横に戦前の修身教科書が展示されていたので、いねいに見た。その中から明治二十七年、明治四十三年、昭和十六年の三冊の教科書を比較してみることにした。

裏 (一) 表

明治二十七年二月八日発行 文部省検定済 発行者 富山房 定価 金八銭	尋常 小学校修身経入門 生徒用
---	-----------------------

二ページの表紙の和紙の青色のうす

一ページ勅語奉答

勝 安芳作

あやに畏かしこき 天皇すめらみの
 あやに尊たんとき 畏かしこくも
 是こゝぞめでたき日本よめとの

あやに尊たんとき 天皇すめらみの

下くだし賜たまへり 大勅語おほいそご

国の教おしえへの 大勅語おほいそご

二ページ第一課父母を敬う

註―修身経入門とある

子を使用

一ページ教育ニ関スル勅語

裏 (二) 表

尋常小学校修身書卷三 児童用	明治四十三年八月二四日 文部省 定価金五銭
-------------------	-----------------------------

厚い黒表紙

二ページ くわうごうへいか
 くわうごうへいか
 はびやうぬんへお
 いでなつて・きず
 をうけたぐんじん
 やびやうきになつ
 たぐんじんをおみ
 まひになりました

註―線は現在と仮名使いがちがう。
 三ページ第一父母に孝行すべし

表

(三)

裏

初等科修身 一
文部省検定済

昭和十七年七月二一日
定価 金拾八銭

ピンク色の表紙

二ページ

遠い大昔のこと、いざなぎのみこと、いざなみのみことといふ、お二方の神様がいらっしやいました。
一行のはじめに段落がある。
句読点をつけている。
一旧仮名づかいである。

一ページ

五十鈴川の山と橋に雲のたなびく色彩画がかかっている

右の三冊について思うこと。

(一)は始めに教育勅語に関すること。国民道徳を基本にすえた教育理念がうかがえる。(一)の勝安芳作の勅語奉答の詩と勝安芳の年令に興味をもった。

(二)は日露戦争の傷病兵がふとんの上に本を置き頭をたれている。その前を皇后陛下が三人の侍従と七人の女官を従えて、兵士を見舞っている。

素直にうけとれぬ感情が走るのも、時の流れのせいで

あろうか。

(三)五十鈴川の神域と神話は皇室を絶対的なものとして、いやが上にも高揚し神格化している。

勝安芳と年代

「海安芳は(一八二二—一九七)幕臣、号は海舟。明治新政府になると海軍大輔に就任した。その後、爵位を受け厚遇されて、余生をもっぱら歴史の編さんなどにすごす。福沢諭吉は、『瘦我慢の説』を書いて勝の後年明治政府出仕を非難したが、勝の眼中には幕府とか薩長とかいう考えはほとんどなかったようである。その点彼は非常に広い視野を持った達人に近い境地を持っていた。」

(日本歴史大辞典—河出書房)

勝安芳は日清戦争を経て三年後まで生きた。七四才であった。

もつべきものはよき友である。今回の展示会に南郡でただ一人見学したT会員から左の資料を頂戴した。

16	皇喜	芳盛	通洲	吉助	朋文	郎典	興漢
32	天慶	安隆	利三	諭退	重有	博平	希龍
46	治川	郷保	沢垣	隈県	藤郷	木野	
42	明徳	勝西	大長	福板	大山	伊東	乃矢
40							
37							
35							
32							
31							
31							
28							
22							
20							
18							

こうしてみると、歴史の年代や人の寿命を小さいこととかなげるとんだ思い違いをすることがある。文久三年（一八六三）東郷平八郎が薩英戦争に参加していたり、乃木希典が陸軍少佐で西南戦争に参加したこともちょっと首をかしげる。ヨーロッパに例をとると、十五世紀のルネッサンスといえば「神曲」を書いたダンテ（一二六五—一三二一）とダビンチ（一三五二—一五一九）やミケランジェロ（一四八三—一五二〇）の名前がでてくるが、ダンテとの年令差は二〇〇年のひらきがある。同じ十五世紀など思っているのは歴史の本質を見失うことになってしまふことがある。

学制に寄与した二人の県人

三百年にわたる徳川封建社会から近代教育の出発を告げる「学制」の大政官布告の内容は、立身出世と殖産興業、有用な学問、全国民の教学のことであった。この大改革にあたり貢献した福沢諭吉、長三洲という傑出した県人がいる。

福沢諭吉

ペリーが浦賀に入港した青年時代から日露戦争開戦三年前迄、六五才の生涯をへた福沢諭吉の思想的系譜には起伏やう余曲折があったのは人の知るところである。青年期の儒教的立身出世主義の蘭学塾から英学塾への転換、壮年期の西欧啓蒙主義から自由民権運動を反対した国権論への転換、明治二十三年頃の学問優位論から経済優位論への富国強兵論の転換、明治二十七年の日清戦争を文明の戦としての戦争肯定論の如くである。諭吉の現実主義的思想はさきの教育史年表にみる明治の御代の流れそのものである。

政府は「学制」公布後五ヶ月ほど県下独自の学校の進展に重点を配っていた。大分県では森下景端参事が福沢

諭吉に依頼して、学校構想案である『学校取建之記』を起草させた。一方中津の旧藩主奥平昌邁まさゆきは自ら慶応義塾に学んだ中津藩士らとアメリカに留学した、福沢と協議して郷校中津市校を設立した。ベスト・セラーとなった『学問のすすめ』はこれを祝して起草されたものという。明治政府の教育施策の動向は福沢諭吉の学校構想にやるべきが大きかった。

長三洲

福沢諭吉と同世代の長三洲は広瀬淡窓の咸宜園に学び旭荘（末弟）の太阪にあった大学の塾長をしたことがある。佐伯の青木猛比古等と共に、宇佐の御許山で討幕の兵をあげ世にいう御許山騒動の中心人物でもあった。明治四年、文部省が設置され全国に学校を設立すると、調査研究学制取調掛十二名の一人に任命された。その結果明治五年発表された「学制大綱」は長三洲が前年十二月に起草した「学制五篇」を骨子としたものであるという。

日田県知事松方正義（第四代内閣総大臣）は日田県内に近代学校を創設しようとした。そこで咸宜園主であった広瀬林外に意見を求めたところ、林外はこれに応じて近代教育方法をもりこんだ「学制の儀」を提議した。文

部省にあって長三洲はこれを参照した。

（以上は「大分県の教育史」―鹿毛基生著を要約したものである。）

学ぶことの楽しみには、苦しみのあることは当然のことである。しかし、この小文を書き上げるまでには苦しみの方が多かった。十分体力が回復していないせいである。二月の下旬に入院した時、何冊かの書物を持ち込んだ。一番先きに読んだのが、恩師故米田貞一大分県立図書館長の遺稿集「大分の横顔」である。その中の『新図書館と両陛下の行幸啓』というところに「もともと本館は郷土の先覚者福沢諭吉の死を記念して、明治三十五年（一九〇二）に官民合同の県教育会が設立したもので、歴史も古く、初代館長には県知事、大久保利武が就任して力を入れたほどである。」と。明治三十七年、同図書館は「福沢記念図書館」と呼称された。

今回の展示会には、大分県立図書館には大へんお世話になった。いままた、恩師米田貞一先生の遺稿集により新たなことを知って私の拙文にしめくりりをして下さった

ような気がしてならない。

雨ふれば

雨をたのしみ

晴るる日は

晴れを

たのしむ

楽しみある

ところに

たのしみ

楽しみなき

ところにも

たのしむ

皆楽堂主人書

花を惜む

福沢 諭吉

半生の行路 苦辛の身

幾度か春を迎え還春を送る

節物は忽々として留むれども止まず

花を惜しむ人は是れ霜を戴くの人

短歌

岩田 トヨ子

(会員・佐伯市長良)

去年咲きし梅の古木の花待てど今年は咲かず枯れに
しものか

谷川の水かるるとも石菖は昔の如くおい茂りける

戦いに四人の子供失いぬ涙かみしめたえし母上

国のため陛下のためと言いつつも年令老いし母は
仏壇に祈る

四人の子を戦に奮われし老いし母の深き悲しみ誰か
知るべき

戦より帰りし人を見るにつけ帰らぬ四人の弟を想う

(註) 皆楽堂は米田先生

詩は吉川英治の文中から

原文作者不明